

ほとけの混和会だより

一月二十八日二十九日
比叡山の寒行に参加



比叡山の根本中堂にて

「ほとけの菜園」と検索して下さい。その他の写真が見られます。

平成二十四年三月

東光院

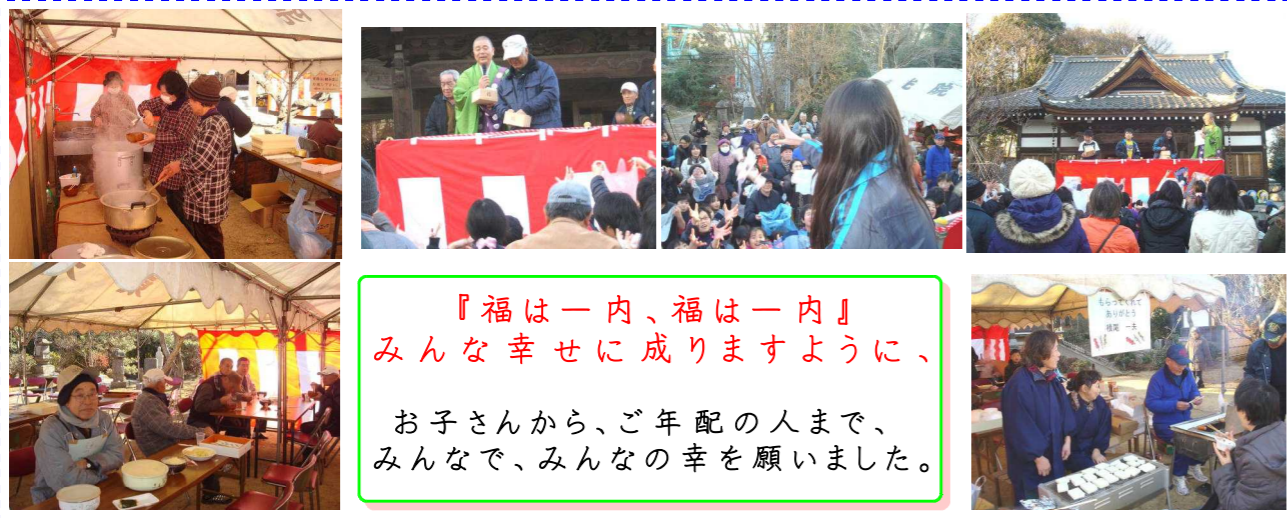
仏の混和会

第89号

寒行の山仰ぎ見む湖西線
華やかな風花のなか山登る
座をただし墨黒冴ゆる写経かな
朝まだき降り添ふ雪の座禅堂
湯豆腐や幾つも角の南禅寺
古川 正栄

延暦寺寒行の集い
写経と座禅 藤原 治子

今年の比叡山には、雪が少なく、シュガーパウダーをふりかけたような杉の樹々が童話の世界のよう



二月三日節分会が
執り行われました。

『福は一内、福は一内』
みんな幸せに成りますように、
お子さんから、ご年配の人まで、
みんなで、みんなの幸を願いました。

うでした。

総勢十三名が亮観師に引率されて到着した延暦寺会館は、「寒行」という言葉にそぐわないほど暖房がよく効いていました。開会式に続いて「開経偈」、「摩訶般若波羅蜜多心経」、「聖句」「宝号」、「回向文」を皆で唱え、導師方による散華です。

「散華」とは、仏の供養のために僧が読経しながら花片または紙で作った五色の蓮華の花弁を声明に合わせながらまくことです。後で参列者が拾い集め、一人でも何枚も手にしていく人もいました。

いよいよ、「法華経」の写経です。「法華経」とは「妙法蓮華経」の略ですが、大乘仏教の代表的な經典の一つだそうです。法華一条の立場を説き、永遠の生命としての仏陀を称えるお経です。これは天台宗、日蓮宗が教義の拠り所としている大事な經典です。

仏教の典籍が中国で翻訳されると經典書写することが盛んになり、印刷術の発達と共にそれは、すたれていったという歴史があります。しかし、現在ではブームと言ってもよいくらい各所で盛んに取り組まれています。不安なこの時代を反映して、写



極楽浄土

ねえねえ、お坊さん
極楽浄土って、どこにあるの

君は、何時も難しい質問をしてくるね、極楽浄土とはね、君の思い、その思い一つで、この世も、来世も、極楽浄土に成るのですよ。



極楽浄土の世界を説いた、阿弥陀経に次のように記されています。

青色青光 (しやうしき・しやうこう)
黄色黄光 (おうしき・おうこう)
赤色赤光 (しゃくしき・しゃくこう)
白色白光 (びやくしき・びやくこう)
この意味は、と言うと極楽浄土に生きている人々は、青色、黄色、赤色、白色、それぞれに於かれた情況や立場、そのままの色で、光り輝き、みんな幸せに暮らしていますよ、と言う事です。

たとえは、「青色」を青年にたとえ、「黄色」を老人とか、黄金色の金持ちにたとえます。更に「赤色」を健康とか、赤貧の貧しい人にたとえ、又「白色」を病人などにたとえて物事を見ていきます。

経の功德とともに、祖先の供養、自他の福利、精神の安定などを願つてのことと言えるでしょうか。私は、今年は、東日本大震災で亡くなられた方々の冥福を祈り避難されている方々の一日でも早い心の平安を願って、一字一仏の心で黙々と書写させて頂きました。

「法華経」の中の「観世音菩薩普門品第二十五偈」を書写しました。これは、「世尊妙相具 我今重問彼 佛子何因縁 名為観世音 具足妙相尊 偈答無盡意 汝聴観音行 善應諸方所」と始まっています。どんな意味でしょうか？

『世尊、観世音菩薩はどのような因縁で観世音と名づけられたのでしょうか。』

『善男子よ、もし無量の衆生がいるいろの苦しみを受けているときこの観世音菩薩のことを聴いて、一心にその名を唱えれば観世音菩薩の方でその声を聴き取ってあらゆる苦しみから救い出してくれるのだ。』

帰ってきてから調べてみると、このような意味でした。

このお経の中に「念彼観音力」という言葉が何度も出てきます。「ただ観音の名を唱えよ」、「ひたすら観世音を念じよ」というような意味でしょうか。何でも自分の力でできると慢心するのではなく、全幅の信頼を観世音に寄せる

ことで救われるということなのでしよう。

たとえ自分自身の悩みをもっていなくとも、現代社会の病巣、戦争、災害、原発の問題等々、沢山の不幸が社会に充ち満ちている現代です。この経を読み解くことは、意義あることだと思えます。

翌朝の根本中堂の厳しい寒気の中での座禅は、「寒行」と言う名にふさわしいものでした。とは言っても軟弱な我々は、カイロを抱え、靴下も着けたまま座していました。

思慮分別を止めることはできず無念無想に到ることも叶いませんでしたが、静かに思いを凝らすことのできた貴重な時間でした。

元々、座禅は禅宗の修行法で、一切の仏教は座禅の中に含まれると言うものですから、座禅の眠気や心のゆるみ等を戒めるための木製の棒を禅宗では「警策」というのが天台宗では「禅杖」と呼ぶというところに「座禅」に対する位置づけの違いが現れていて面白いと思いました。

二日間の日程は昨年までと同様でしたから、今年は、「法華経」と「座禅」について少し紹介させて頂きました。俗界から離れたお山での二日間は、短くも気持ちの良いものでした。合掌有り難う御座いました。



それはね、老人は豊かな人生経験によって得た、深い人望と真の智慧、更に、とらわれの無い丸い心を身を以て伝える事が出来ます。よって老人は老人のまま光る事が出来ます。

貧しさや病などを経験された方は、人の痛みの解る、慈愛心が抱けます。その慈愛心を生かして、貧しいまま、又病を得たまま、光り輝く事が出来ます。

すべて、今おかれている状況を、否定的に受け止めるのではなく、肯定的に受け止めて、あるがままに生きている事が出来れば、全てが光り輝いて参ります。

又私達は、みんな幸せに成りたいと思います。そして、人を押し自分のだけの幸を願ってしまいません。それは、裏を返せば、他の不幸を願う事に成っているのですね、これでは、極楽浄土には成りません。

そのところを、己を忘れて他の幸を願う、この仏様と同じ御心が得られれば、そこがそのまま極楽浄土に成って、それぞれに光り輝く事が出来ます。

大変難しい事ではありませんが、この世も、来世も、共に他の幸を念じ合える、極楽浄土と成るよう勤めて参りたいと存じます。合掌

私達は、迷いの世界に生きる人々は、若い人は良くして老人は良くないとか、金持ちは幸せな人で、貧しい人は不幸な人、更に健康な人は良くして病人は悪いなどと、己の都合で物事を判断してしまっています。

しかし、極楽浄土に生きる人々は、老人は老人のままに光り輝き、貧しい人は貧しいままに、病人は病人のままに光り輝く事が出来るのです。と説いて下さっているのです。ようするに、極楽浄土に住む人々は、金持ちが良くして、貧乏が良くないと言う風に、物事を考えず、貧乏は貧乏のままに、病人は病人のままに、今、於かれています。そのままの自分で、光り輝く智慧をもっていると言う事かと思えます。



極楽浄土は死後の世界だけに存在するものではありません。この世に於いて、極楽浄土に生きる智慧を得ようと志した人が、死後に於いても、極楽浄土に往生し、安心に満たされる日々を歩むことが出来るのです。



それでは、老人や病人、そして貧しい人達が、光り輝く智慧を得るには、どうしたら良いのですか、